一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

大学教育国際化の課題、工程、意義
—「チューニング」に焦点をあてて—

松塚　ゆかり
一橋大学
森有礼高等教育国際流動化センター

群馬大学FD講演
2015年12月　7日（月）

概要

Ⅰ　課題：　日本の大学が直面する課題

- ➢国際化の現況
- ➢世界共通の課題

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組

- ➢ 「チューニング」に焦点をあてて

　　チューニングとコンピテンス定義

　　チューニングの実践行程

Ⅲ　意義：　チューニングの効果、貢献、課題

Ⅰ　課題：　日本の大学が直面する課題

◆ 高等教育の自由化、グローバル化、市場化にともなう、個別大学の国際競争力強化の要請
◆ 高等教育の「ユニヴァーサル化」と就学人口の減少
◆ 質保証の要求にともなう、学習内容と、その成果の「可視化」
　⇒　評価の透明性確保と説明責任の遂行
　⇒　単位と学位の国際的質保証

中教審答申「学士課程教育の構築にむけて」（2008年）
1）分野別の質保証、2）学習成果の国際基準、3）学位に付記する専攻名称のルール化と国際標準化

◆ 社会人学生の「学び直し」機会の拡充
◆ 学期編成、カリキュラム、科目の国際通用性強化の要求
◆ 単位累積・加算を促進する基盤整備　⇒「縦」「横」両方の国内・国家間流動性促進
◆ 国立大学法人機能強化の要請

Ⅰ　課題：　日本の大学が直面する課題
―国際化の現況―
加速する高等教育グローバル化促進計画

一橋大学 HITOTSUBASHI UNIVERSITY

2013年6月14日閣議決定：「日本再興戦略」、「第二期教育振興基本計画」

- **2020年までに日本人の海外留学者数を倍増する。**
  （大学等：　6万人から12万人、高校：　3万人から6万人）

内閣官房、内閣府、外務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、官公庁　（2014年4月）

【文部科学省】　「未来へ飛躍するグローバル人材の育成　―グローバル人材育成のための大学の国際化と学生の双方向交流―」

1．大学教育のグローバル展開力の強化

（1）大学の体制の国際化、（2）教育プログラムの国際化

予算額：　2013年；　96億　→　2014年；　127億　→　2015年；　110億円

2．大学等の留学生交流の推進（充実）

（1）大学等の留学支援制度の創設等、（2）優秀な外国人留学生の戦略的受入

予算額：　2013年；　335億　→　2014年；　355億　→　2015年；　353億円

制度面：　学期制改革及び秋入学の検討、単位制度改革

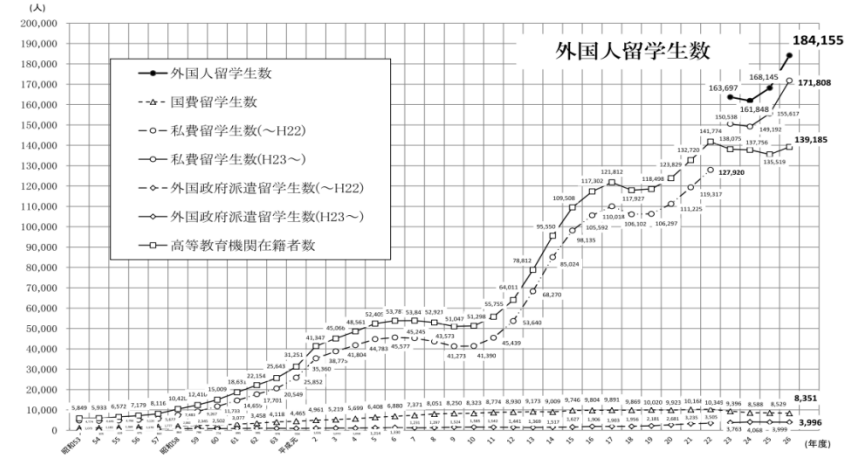
支援面：　留学支援制度の拡充（奨学金、現地で入学許可、支援スタッフ配置等）

教育面：　教育交流プログラムの開発と実践

Ⅰ　課題：　日本の大学が直面する課題
―国際化の現況―
日本の状況、世界の状況

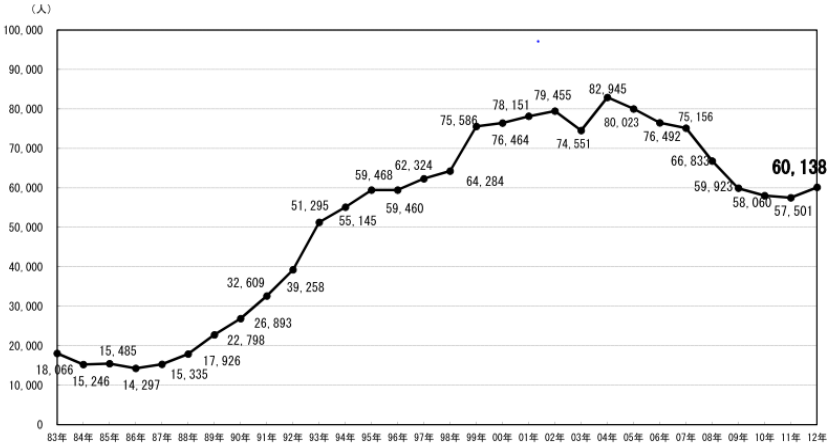
一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

日本の大学に在籍する外国人留学生の推移



※「出入国管理及び難民認定法」の改正（平成21年7月15日公布）により、平成22年7月1日付けで在留資格「留学」「就学」が一本化されたことから、平成23年5月以降は日本語教育機関に在籍する留学生も含めた留学生数も計上。

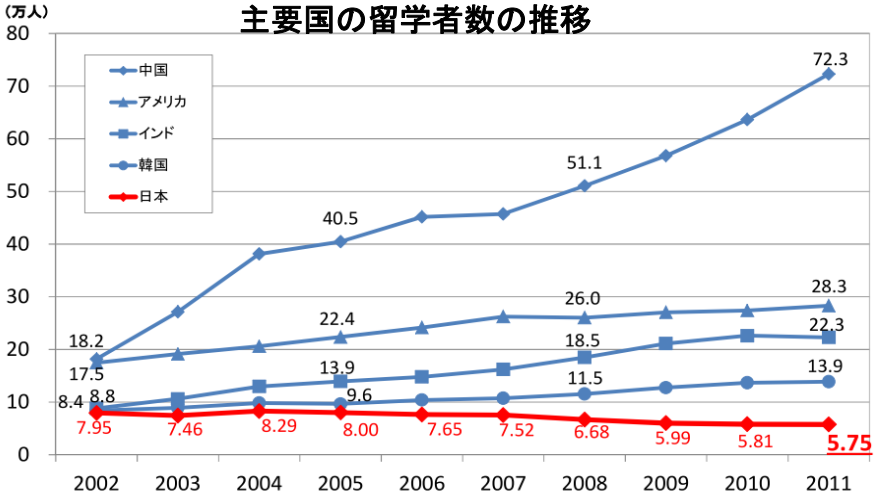
海外に留学する日本人大学生の推移



（出典） OECD「Education at a Glance」，ユネスコ統計局，IIE「Open Doors」，中国教育部，台湾教育部

日本の外国人留学生、海外に留学する日本人学生ともに全般的に上昇し、特に2000年以降顕著な上昇が見られる。

主要国の留学者数の推移



（出典） 米国はIIE「OPEN DOORS」，その他の国はOECD「Education at a Glance」，UNESCO「Institute for Statistics」

しかし、海外の主要国（パートナー国）と比較すると全般的に留学者数は少なく、上昇の程度も弱い。

Ⅰ　課題：　日本の大学が直面する課題
―国際化の現況―

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

学生の声から

- 日本の社会的、経済的な安定性を基礎とした生活のしやすさや豊かさを維持し、大きな失敗をしたくないという「リスクヘッジ」の傾向
- どのような留学をすると将来につながるのかが不明確
- 留学は就職につながらないばかりでなく、就職時期を逸する
- 留学費用のこともあり、両親や家族の理解が得られない
- 留学先の情報が少なく、単位の認定状況が把握できない

国立大学協会国際交流委員会「留学制度の改善に関するWG」（2007）から

- 海外経験はしたいが、留学の必要性とメリットが良くわからない
- 海外での学習が、どのように将来の就職やキャリアに役に立つのかがわからない
- 留学をすると就職が遅れるし、将来の展望が見えにくくなる
- 留学に費やす金銭的負担や時間に見合う効果が得られるのか
- どのような科目を取れば単位互換ができるのか「事前に」わからない

➢ 優秀な学生に見られる日本を出ない傾向
➢ 「機会コスト」を含む、費用負担への懸念

一橋大学での聞き取り調査（2012~2014）から

→ 高等教育のユニバーサル化に伴う、これまでとは異なる留学生層と費用対効果に関する意識変化

Ⅰ　課題：　日本の大学が直面する課題
―世界共通の課題；　何が学生を動かすのか―

留学と留学先を決めるのは誰か

1.	自分	73.8%
2.	親	9.6%
3.	キャリア・アドバイザー	6.6%
4.	友人	4.6%
5.	両親以外の家族	4.4%
6.	エージェント	1.0%

With respondents of 45, 543 from prospective international students in 201 countries with 207 nationalities

Hobsons EMEA (2015). International Student Survey 2015: Value and the Modern International student

留学先の大学を決める際の相対的重要度

1.	教科や課程の評価	25・9%
2.	卒業者の就職率	21.56%
3.	大学のランキング	19.36%
4.	授業料他就学費用	17.1%
5.	卒業時の初任給	16.3%

➢　留学の有無と留学先は学生個々人が、留学後の就職可能性やキャリア形成を勘案しながら、留学先候補大学の教科や課程を検討して決める。留学に際しては、そのコストに見合う意義と効果を期待することに併せて、単位互換等、単位（学位）取得を円滑にすることをもとめている。

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―チューニング―

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

1. チューニングとは

楽器を「チューニング（調律）」するように、学習する内容、それにより得られる能力（コンピテンス）、学習成果、評価方法等を国内外の大学間で確認・共有することにより、国際的共通理解に基づいたコース設計と単位・学位認定の基盤を形成し、大学教育の国際的互換性を高める手続き

2. チューニングの目的

カリキュラムの統一化、規格化、標準化を目的とするのではなく、学生を主体として「学習」重視の観点から、専門分野別に教員主導により、以下の達成を目指す。

- 学習の内容を可視化し、課程に関するアカウンタビリティ「説明責任」を強化する
- 学習内容の比較可能性を高めて、学生の流動化と、学習機会の多様化を促進する
- 各大学における教育の独自性や特色を明確にし、そのさらなる強化をはかる

3. チューニングの特徴

- 学生中心　➢教員が「何を教えるか」ではなく、学生が「何を学ぶか」に重点を置く
- 大学主導、教員主導　➢大学と教員の自律性を尊重する
- 多様な文化や慣習、地域の独自性の重視　➢各国・地域個別のニーズに併せて柔軟な適用を奨励
- 地域的制約がない　➢学生の移動とともに、その実践と成果が自由に共有される
- エンプロイアビリティーを重視　➢雇用主や卒業生とチューニング成果の社会・経済的妥当性を確認・協議する各国の教育、訓練、雇用ニーズへの応答性を高めることを重視（Gonzalez and Wagenaar 2003）

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―チューニング発展の経緯―

◆　欧州ボローニャプロセス（1999～）とリスボン戦略（2000）

目的：　欧州高等教育圏の構築と人的資源開発・強化

基本方針：　欧州域内の大学が教育制度や質評価について共通の枠組みを設定し、相互交流を促進して欧州全体の教育・研究力を強化する。 そのために、加盟国で学位の構造並びに修学課程の年数や内容について情報を共有し、互いの教育・研究内容を比較できるようにして、教育の質を確認しつつ域内の流動性を高める。

◆　チューニング　「ボローニャプロセスへの大学の貢献」

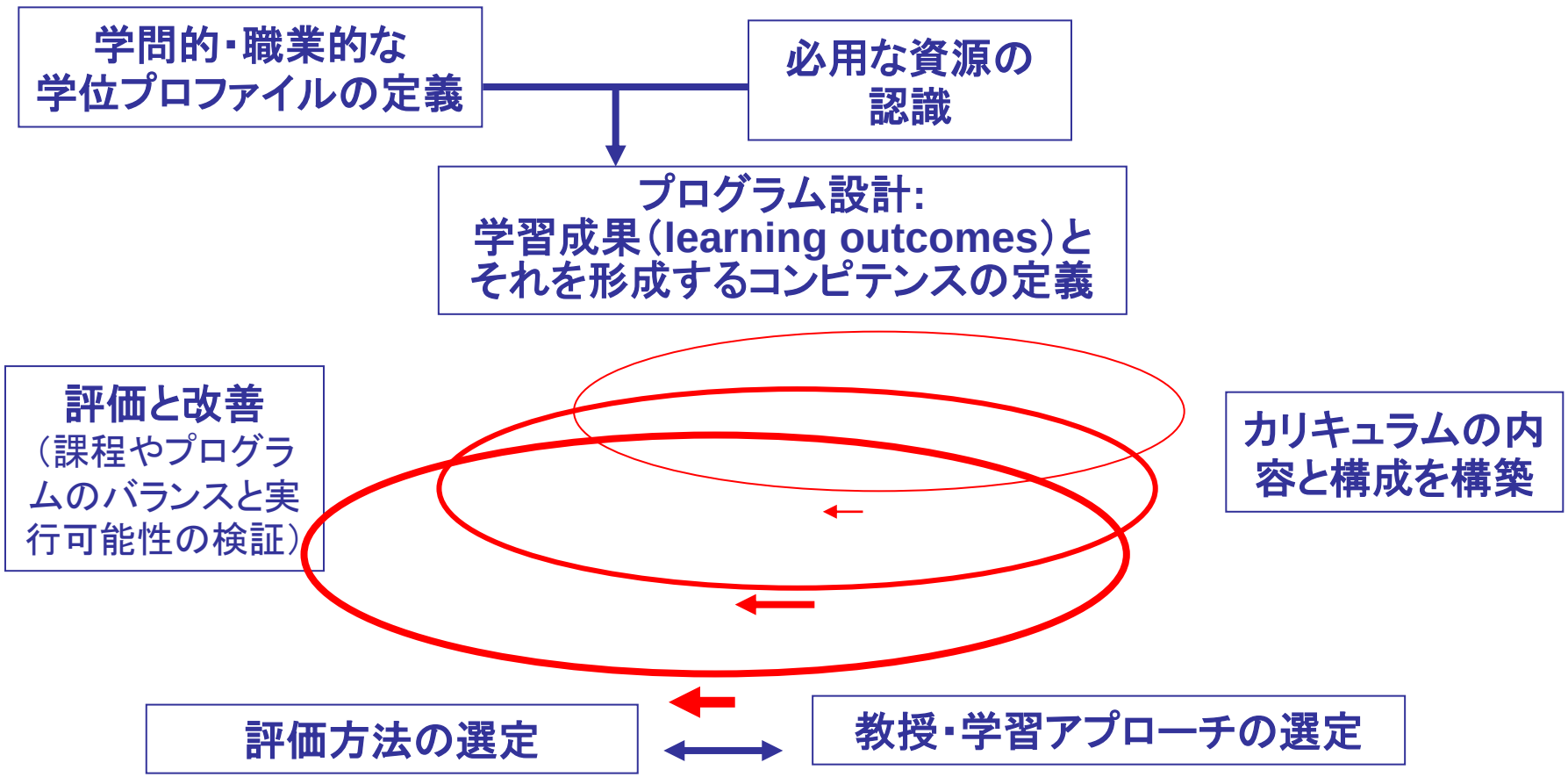
2000年に欧州委員会の指導のもとに、フローニンゲン大学とデュウスト大学が幹事校となり、大学主体の事業として 2000年にTuning Educational Structures in Europe が創始。EU域内でバラバラであった、単位制度、学位認証、資格認定を共有し、域内全体で大学教育の質保証をはかりつつ、学生の流動性を高めようとした。

◆　チューニングの急速な世界的展開

2008年	Tuning USA
2010年	Tuning Russia
2011年	Tuning Australia, Tuning Africa, Tuning América Latina
2012年	Tuning Canada, Tuning AHELO
2013年	Tuning CAHEA 中国が参加を決定
2013年	Tuning Japan

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組

チューニングによるカリキュラム開発のサイクル



Robert Wagenaar and Pablo Beneitone (2015) "The International Tuning Academy Introduced" Tuning Academy in Japan, Hitotsubashi University, March 19, 2015

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―チューニングの10ステップ―

1. ニーズと潜在性の確認
2. 学位プロファイルとキーコンピテンスの定義
3. プログラムの学習成果（Learning Outcomes)を詳述
4. モジュール化の有無を決定する
5. 各モジュール、教科あるいはプログラムごとに、修得されるコンピテンスを明らかにして学習成果を詳述する
6. 教授、学習、評価方法を決定する
7. 重要な一般的（汎用的）コンピテンスと分野固有のコンピテンスが含まれていることを確認する
8. プログラムやコースを詳述する
9. 課程やプログラムとしてのバランスと実行可能性を検証する
10. 実践、モニター、改善

Tuning Educational Structures in Europe

Robert Wagenaar "Tuning Methodology for the Design, Delivery and Enhancement of Degree Program." Workshop Tuning Japan, Hitotsubashi University (Oct 16, 2013)

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―チューニング・パイロットスタディ（コンピテンス調査）

学生、教員、卒業生、企業その他の雇用主（以下雇用主）を対象に、大学で習得することが期待される知識や技能（コンピテンス）とその学習達成度を明らかにし、結果を国内外の大学間で比較検討することにより、個々の大学がそれぞれの強みと特色を認識・強化し、国際的観点から教育課程の編成、カリキュラム、教育内容を向上させることを目的とする。

➢　チューニングにおける「コンピテンス」と「学習成果」

コンピテンスとは、認知的・メタ認知的技能、知識と理解/洞察、対人的・知的・実践的技能、および倫理的価値が有機的に結合したものを意味する。

➢　コンピテンスは学生が修得するもの

学習成果とは、学習者が学習を修了した時点で、何を知り、理解し、実行できるようになっていると期待されるかを詳述したもの。単一の科目やモジュールに対応する場合もあるし、第1，2，3サイクルのように、一定の学習期間に対応する場合もある。単位修得における必要条件はこの学習成果によって規定される。

➢　学習成果は教職員によって定義される

Robert Wagenaar “Tuning Competences Frameworks: Key Tools for Educational Reform and the Assessment and Comparison of learning in Global perspective.” International Symposium on Education Reform 2013 (December 10, 2013)

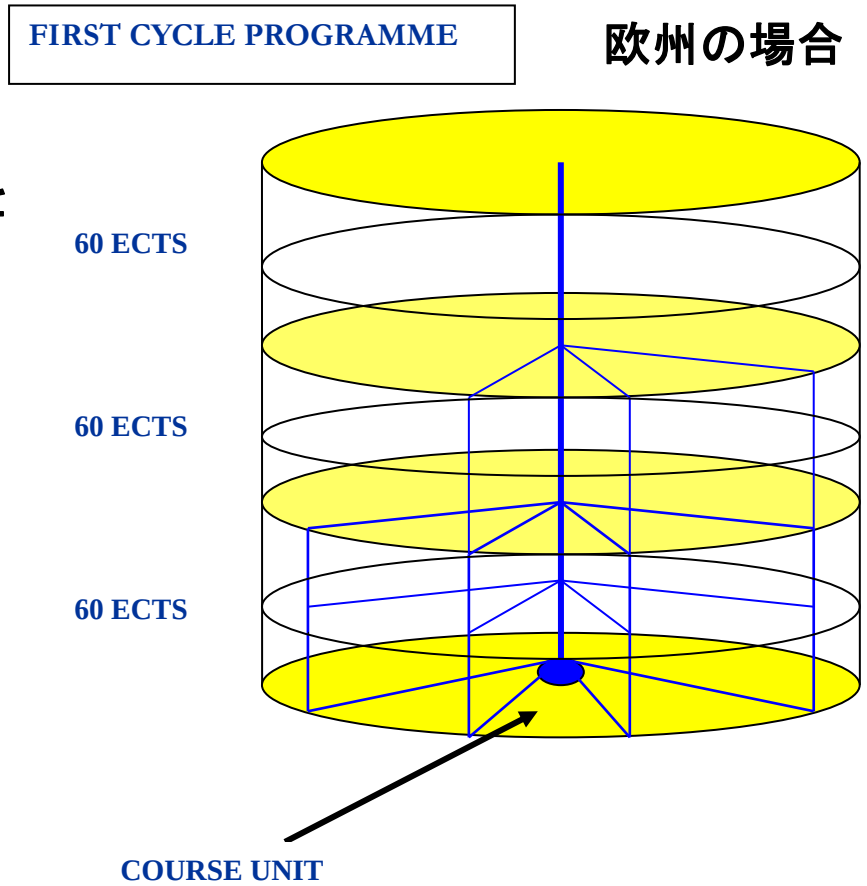
Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―チューニングにおける学位プロファイルと構成単位―

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

- ◆ 企業や卒業生から社会や産業のニーズを確認する
- ◆ 上記を参考に分野別に学位プロファイルを定義する
- ◆ 学位課程の各サイクルでの学習内容と養成されるコンピテンスを明確にする
  - ＊汎用的コンピテンス
  - ＊専門的コンピテンス
- ◆ 多様性と特色を尊重し、期待される学習成果に基づく学位課程のプロファイルを確認し、それを構成するコンピテンス定義の見直しと改善をはかる

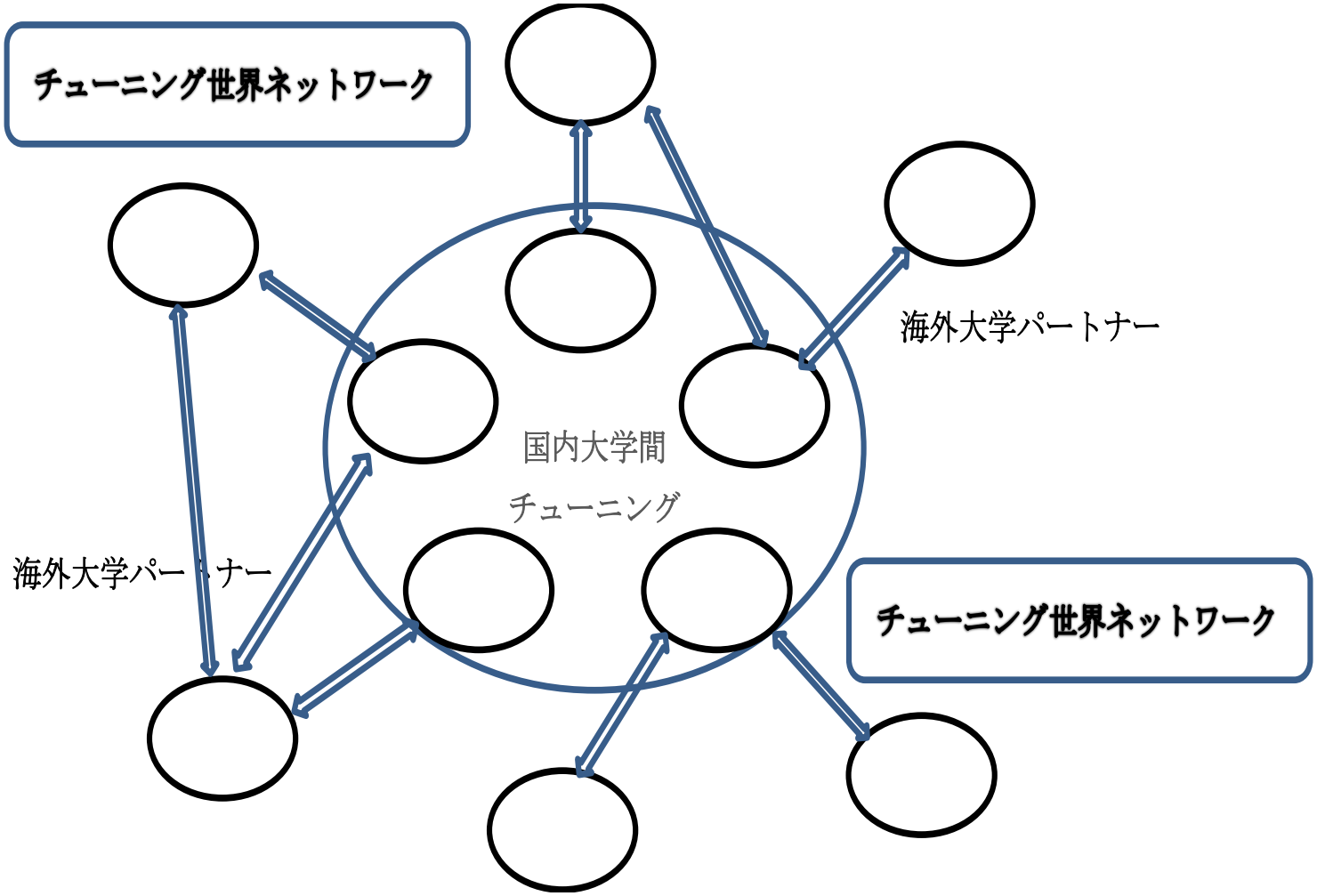
⇒情報共有
⇒比較可能性の向上
⇒流動性の促進

欧州の場合



Robert Wagenaar (2013) "Tuning Methodology for the Design, Delivery and Enhancement of Degree Programmes " Workshop Tuning Japan, Hitotsubashi University October 16, 2013

Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―大学間協働の枠組み―



Ⅱ　工程：　国際化を進めるための取組
―コンピテンス定義のプロセス―

マクロ的裏付けとミクロ的経験の蓄積

1．コンピテンス調査によるマクロ的裏付け

◆　社会のニーズと教育提供者の間の認識の違いを探る

◆　課程の体系化のために、学位プロファイルの構成要素として

　　○　あるべきして欠けているコンピテンスの認識

　　○　科目間、モジュール間で重複するコンピテンスの 認識

　　○　修得されるコンピテンスの発展的連続性の確認、　が可能

2．調査結果をミクロ的経験の蓄積に対応させる

例：　シラバスの活用

◆　学生の視点から授業の内容（学生の学習内容）と期待される学習成果を教員が確認し、十分に説明できるようにする

◆　付帯効果：　①情報提供の充実化と、教育と学習に関する実態の把握
　　②学生の積極的履修選択と自律的学習を促す

➢　授業の積み重ねが課程を形成する。⇒各授業の成果の積み重ねが課程を通した成果の主要な部分となる

2. ミクロ的経験の蓄積

ウェブシラバスの活用

一橋大学 HITOTSUBASHI UNIVERSITY

ウェブシラバス（3分の1頁）コンピテンスベースのアプローチ

科目名	ドイツ語文学・文化研究	学期	夏
科目区分	XXXX　科目	曜日・時限	月3
教員名	XXXX	単位	2
開講年度	XXXX年度		
学部・学生の指定	XXXXX		
質問等の連絡先・オフィスアワー	質問の連絡先は、××××@×××まで。 オフィスアワーは〇曜日〇限です。		
授言語	J　およびドイツ語		

【授業概要】は「履修ブック」に転載されます

【授業概要】
1.授業概要

最終更新日：2013-〇〇-××

【授業の目的】
本講義は、
ドイツ語圏の児童文学作品の読解を通して、
・歴史・社会・文化的背景の考察
・読解のための理論的枠組の理解
・児童文学研究としての読解例の蓄積 ・ドイツ語独特の表現の魅力を味わうこと
を目的とする。

教員が学生に何を期待しているのかがわかるよう、授業の「ねらい」を記入してください。

【授業の到達目標】
・ドイツ語圏の児童文学史の特徴を理解できるようになるこ
・作品に表されている自然観、教育観、家族観、人間や社会
・ドイツ語の読解能力の向上
・ドイツ語独特の表現に対する理解や感性を高め、言語表現を豊かにすること
・児童文学（ひいては「文学」全体）を学問的に追究するための基本的知識・
・複数の作品を分析・統合し、自らの考察をもとに言語化し発表することがで

本授業を通じて学生が習得・理解し、活用できるよう期待される知識・技能・能力等の学習成果を記入してください。その際に、①本授業特定の専門的知識・技能・能力、並びに②分析力、企画力、自律的学習力など一般的能力の両面における成果をご検討ください　注1。

【授業の方法】
毎回、受講者数名に作品の要旨・考察・疑問点について発表してもらう。
ションを行い、作品への理解を深める。
受講者は自身の発表経験や他者の発表を通じて、作品を理解し、考察を共有し、ドイツ語及びドイツ文化に関する文献の読解能力を養う。

講義、演習、実習・実験、グループ学習、インターンシップなど授業の形態を記入してください。電子機器など特に使用する機器などもあわせて記入してください。注2

注1　　一般的能力の例として、分析・統合する能力、問題解決力、意思決定力、リーダシップの能力、自主的に学習する能力、組織力、調整力、計画力、企画力、協力し合う力、コミュニケーション能力などが挙げられます。
注2　　その他、ワークショップ、自主学習、プレゼンテーション、フィールドワーク、チュートリアル、プロジェクト学習、指導つき個人研究、オンライン・遠隔指導など、任意に記入してください。

他の記入項目：

1. 授業概要その他
【他の授業との関連】
【教育課程の中での位置づけ】

2. 授業の内容と計画
【授業の内容】
【計画（回数、テーマ等）
【テキスト・文献】
【授業時間外の学習（求められる予習・復習の内容）】

3. 評価
【成績評価の方法】
【成績評価基準】

4. その他
【受講生に対するメッセージ、他】

Ⅱ　意義：　チューニングの意義
―国内外で期待される効果―

国内で期待される効果

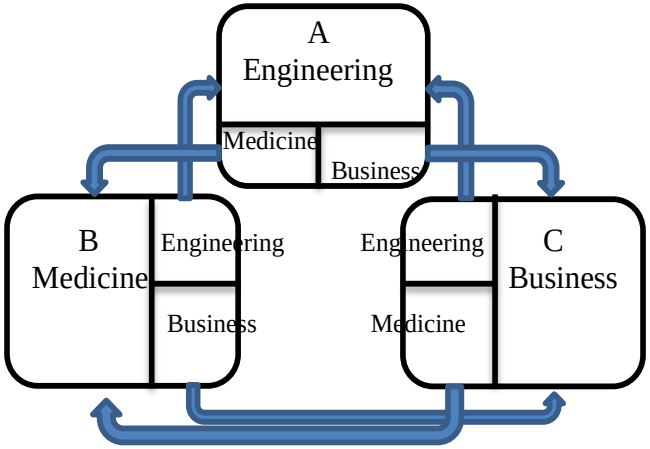
- ◆ 学習内容と成果の可視化による説明責任の遂行
- ◆ 科目、プログラム、課程の体系化と連続性の確保
  - ➢ 三つのポリシー等教学方針の策定と検証を容易にする
  - ➢ 転学、編入、復学の増加
  - ➢ 社会人の「学び直し」の機会を拡充
- ◆ 単位の実質化に基づく、高質な学位授与件数の増加
- ◆ 「結果としての」質保証

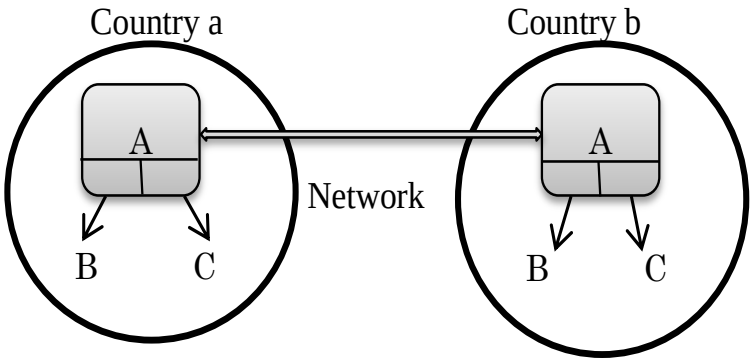
国際面で期待される効果

- ◆ 単位・学位の比較可能性と互換性の確保による、相互認定基盤の確立
- ◆ 加算式単位制度の国際的運用による、円滑なモビリティーの促進
- ◆ 連携学位の増加と充実による、留学・研究交流の増大
- ◆ 国際標準に即した教育の質保証へのインセンティブ
- ◆ 日本の大学の機能あるいは分野競争力の強化

Ⅱ　意義：　チューニングの意義
―機能強化面での効果―

例





- 国内の複数大学の連携による分野別チューニング
- それぞれの分野で海外有数の国際パートナーを有する大学を中心に国際分野別チューニング
- 国際チューニング成果を、国内の再チューニングにより調整する。

例１：　分野間チューニング　(Horizontal tuning based on comparative advantage)

⇒ 「多角化」「高度化」

⇒ 補完性を活用して、領域における高度な英知を組み合わせる

例2：　専門特化型チューニング (Vertical tuning for competitive advantage)

⇒ 「高度化」「国際化」

⇒ 専門性を極めて、知識基盤社会における高質なモビリティーを実現する

Ⅱ　意義：　チューニングの意義
―貢献と課題―

貢献

- ◆ コンピテンス定義を大学とそのステイクホルダーで議論すること自体に意義がある
- ◆ 社会や学生に対する説明責任を世界的観点から遂行しうる
- ◆ 成績評価や単位・学位の授与に実質性、透明性、信頼性を持たせうる
- ◆「学生本位」であることは、流動化の進行に伴い、むしろ不可欠
- ◆ 理論的には、機能分化型の「共存」を可能とする

課題

- ◆ アウトカムアセスメントと演繹的なアプローチが内包する問題への対応
- ◆「ニーズベース」の大学教育が川上と川下に及ぼす影響に深慮要
- ◆ 学習成果の定義における「到達目標」と「ミニマムスタンダード」
- ◆ 参照基準の汎用性、共有度、応用性への配慮
- ◆「相対的価値」と「絶対的価値」、「共存」と「階層化」の曖昧性

おわりに

- チューニング、コンピテンス調査ともに、実践組織、枠組み、内容は各国独自のニーズと課題に即して設計されることが望ましい。
  - チューニング世界ネットワークの共通した見解
- コンピテンス定義の大学間共有においては、その目的は何であるのか、共有を経て何を実現しようとするのかを明らかにすることが重要。
- 質保証質保証については、国内に既にある実績、経験、リソースに学び活用しつつ、チューニングと連関させて、日本の大学全体のレヴェルアップにつながる大学交流のありかたを探る。
- 同時にコンピテンス定義とチューニングのプロセスを分野別に海外の大学と連携実践することは、国際的通用性の確保と流動性の向上につながる。
- 海外連携チューニングの成果は国内に還元し、広義のPDCAサイクルの実現を図る。

ご清聴ありがとうございました。

さらにご関心のある方は、以下のサイトをご参照ください。

Tuning Educational Structure in Europe: http://www.tuningeu.org

Tuning Academy： http://tuningacademy.org/

Tuning Japan： http://www.tuningjapan.org